

フランス自然主義と決定論

—20世紀におけるその命運—

常岡 晃

西洋近代小説の源流を19世紀半ばの写実主義小説あたりに求めるのがほぼ常識的な線だろう。1850年代に始まったこのフランス写実主義小説は、次第に発達して、70年代には自然主義小説と呼ばれ、以後20年ばかり隆盛を極めることになる。このフランス自然主義の特質は、1850年代から始まるフランス写実主義小説の極端な誇張に加えて、実証主義精神のより一層の自覚にあったと云ってよい。そもそもこの実証主義は、18世紀のディドロに代表される百科全書派アンシクロペヂストあたりに源を發しており、更にこの派の最後の大立者コンドルセイデオロギによって中継された観念学派によって育まれたと云ってよかろう。19世紀に開花したこの実証主義の正当な継承者は、哲学、社会科学の分野では、クーザン、コント、テーヌ等であり、文芸の分野ではスタンダール、バルザックからフローベールを経てゾラへつながる系譜の人達である。そして18世紀に芽生え19世紀に一応の結実を見た実証主義の最も強烈な体現者として、このゾラがこれを自覚的に文学に導入しようとしたことも間違いないところであろう。

ところで、この実証主義精神をゾラに最も強く鼓吹したのが、哲学の分野でのテーヌ、自然科学の分野でのクロード・ベルナールのふたりであることはよく知られているところである。そしてこの両者の実証主義のいわば核とも云うべきものが、これから述べる決定論（デテルミニズム）的思考であろう。決定論と一口に云っても、これは西洋においては長く複雑な歴史があり、遠くマルクス・アウレリウスの古代ローマ時代から、それは或時期には哲学的色彩を帯びたり、また或時期には神学的色彩を濃くしたり絶えず揺れ動いて今日に至っており、簡単に定義できない。しかし、このような素朴な決定論のもろもろの概念が真に近代的決定論の概念を形成しはじめたのは、カン

トを経て、天文学者ラプラスの頃かと思われる。そして近代科学の裏付けのもとに、最も妥当な決定論の概念に達したのが19世紀半ばの、今から述べるベルナル及びテーヌの頃かと思われる。そこでそれを要約して云えば「宇宙のあらゆる現象が先行諸原因によって厳密に決定されている」と主張する説と考えてよからう。

さてテーヌの決定論は彼の有名な『英文学史』(1864-69)の序文に見られる、「物理的事実であろうと、精神的事実であろうと、事実には常に原因がある。…悪徳も美德も、硫酸塩や砂糖のように生成物であり、すべて複雑な所与は、極めて単純な他のものもろの所与に依存し、それらの集合によって生成する。それ故に、物理的性質の原因たる単純なる諸所与を探求すると同様に、精神的性質の原因たる単純なる諸所与を探求しよう。」(『文学史の方法』)という極めて科学的な精神態度である。彼は「物理界におけると同様に、精神界にも同様に密接に結合している連鎖関係があり、いずれの世界においても普遍的に行きわたっているのである」(同前)として、物理界を支配している因果律が精神界にも及ぶことを力説し、この理論を文芸界にも適用しようとした。要するにテーヌは、ピエール・マルチノも云う如く、「自然環境が四方八方から我々の運命に影響し、個人の歴史は国家の歴史と同様、最も厳格な決定論に支配されている」(『フランス自然主義』)として、フランス自然主義に強力な文芸理論を提供することになるのである。

次に自然科学界におけるクロード・ベルナルの決定論はどういうものか。彼は、ゾラの『実験小説論』(1880)の殆ど底本となった名著『実験医学序説』(1865)において次のように云う。

「生物においても、無生物におけると同様に、総ての現象の存在条件は絶対的に決定されているということを実験学の公理として、先ず承認しなければならぬ。換言すれば或る現象の条件が一旦知られ且つ実現されたならば、其の後この現象は実験派の心のままに常に必然的に作り出されなければならぬ。この命題を否定するならば、それはとりも直さず科学自身を否定することになるであろう。実際また科学は決定されたものと、決定し得べきものとに過ぎないから、同一条件においては総ての現象が同一であり、条件がもはや同一でなくなれば現象も亦同一でなくなるということを公理として固く承認しなければならぬ。」

これをひとことで云えば、ベルナルの決定論は、「同じ条件の下では、

同じ原因は同じ結果を生む」という極めて単純明快な理論であって、深遠にして高踏的な哲学思想ではない。ライプニッツ流の宿命論的決定論の呪縛を脱した極めて即物的な科学実験家のそれである。更に彼は「この原理は無生物現象においても生物現象においても絶対的であって、生命について抱いているわれわれの考えがどうであろうと、生命の影響もこの原理に向かっては何等の変更を加えることは出来ぬ」(同前)として、彼は決定論をはじめて生物界に持ちこみ、ラプラス流の観察科学的決定論から、実験科学的決定論へ——ベルナル自身がかつていっているように、消極的の科学から積極的の科学への質的変換を示しているのであり、彼の決定論は、従来の観念論的乃至形而上学的決定論を離れて、はじめて実地の科学実験をふまえた唯物論的決定論に達していると言えよう。

要するに、テーヌ、ベルナル両者の決定論は、ニュアンスの違いこそあれ、一切を「因果の必然」によって説明しようとする近代科学の世界観に基いていることは間違いない。そして、このような「因果律」を最重要視するいわば因果決定論(科学的決定論と云ってもよからう)は、それを最も強烈に自覚したゾラのみならず、19世紀後半の写実主義乃至自然主義作家達の常識となったわけで、やがて、これが以後の小説作法をがんじがらめに縛って行くことになる。

もっとも、このような思潮の中心人物的存在となったテーヌやゾラや思想や作風に対して、直ちに攻撃や批判がなされなかったわけではない。例えばブリュンチエールの『自然主義の破産』(1887)やブールジェの『弟子』(1889)はよく知られているところである。しかし平岡昇氏も鋭く指摘しているように両者とも科学的決定論を「道徳的に有害な影響を及ぼす学説として痛烈に非難して」(『プロボI』)いるはずなのに、実は真の批判者たりえないのである。即ち前者においては、もともと決定論的な進化論者でありテーヌ流の科学的、客観的主義を奉じているわけで、彼は「その道徳主義にわざわざいわれて、科学に対して道徳の優位を強調した」(同前)にすぎないし、後者においては、その「創作の方法論としてこの作を生かしているものは全篇を通じて明らかのように、心理的決定論による描写、その執拗なほどの心理主義的な方法であった」(同前)わけであり、したがって彼は「この作品において、道徳思想としては、決然として科学的な決定論からはなれて、カトリック的なもの、伝統的なものに近づいたといえようが、人間観察の重要

な方法は依然として彼が非難した哲学から学んでいるのである。」(同前)つまり、両者ともモラルの領域に決定論を持ちこむことには激しく抵抗するけれども、依然として時代思潮の決定論の呪縛から脱していないわけである。この時期、万物を因果律の必然によって説明しようとするこのような決定論への真の批判者たりえたのは、フランスにおいては「生の哲学」の代表者、ベルクソンの『意識の直接所与についての試論』(1889)だと云えそうだが、これは勿論文学作品ではなく、したがって、この小論で問題にしている小説作法に、この時点で、直ちに影響を及ぼしたとは思われない。「生の哲学」が「人間の自由な主体的生存の自覚」を促して、実存主義文学の源流と称されるのはずっと後になってからである。したがって、今まで述べてきた厳格な科学的因果律によって武装された決定論が、19世紀後半以後表面的には様々な反撃を受けながらも、依然としてフランス小説作法のバックボーンとなっていたことは間違いあるまい。

このような決定論を下敷きにした19世紀的小説作法を打ち破ろうとする試みがなされるのは、漸く20世紀も始まろうとする時期である。以下限られた紙数の許す限り、その例を挙げて、20世紀フランス小説における決定論の消長——厳密に云えば解体——の軌跡を辿ってみたい。

先ずこの試みはジイドによって始められたのではないか。奇しくも19世紀最後の年に書かれた『鎖を離れたプロメテ』(1899)は、ジイド自身が名付けた「諷刺喜劇」の部類に入る作品だが、この一篇は「自意識という近代病に虐げられた一詩人のそれからの解放」という主題に託した、作者自身の魂の遍歴を戯画化したソチと解すべきだろう。だが、それにもまして、われわれはこの作品の冒頭の心憎いばかりの例の「無償の行為」の演出に注目したい。

——パリの路上で肥っちょの紳士(実はズウス)が、路上でわざとハンカチを落とし、それを親切に拾ってくれた痩せた紳士(実はコクレス)にお礼を云って封筒を差出し、誰か知り合いの名前を書いてくれないか、と頼む。相手のコクレスが知り合いの名前(ダモクレス)を書いて手渡すと、ズウスはこのコクレスの横面に鼻血が出るほど平手打ちをくらわせ、馬車を呼びとめて姿を消す。そして自分とは何の面識もない、たったいまコクレスが書いてくれたダモクレス宛に500フラン紙幣を郵送する——

これがこのソチの発端である。続いてジイドは作中のカフェの給仕に「無償の行為」の注釈をさせる。「無償の行為！ …私は以前から人間と動物とを区別するものはここにある。つまり無償の行為にあると考えていたのです。私に云わせれば、人間とは無償の行為をなす動物のことです。しかしそのうちその反対を考えだしました。つまり因縁なしには行動することが出来ない唯一の存在は人間である、と。因縁なしにってんです！ まあ考えて御覧なさい、理屈なしに。そう、動機なしに、といった方がお気に召しますかしら、とにかく、それじゃ行為が出来ないというのです。そう考えると私は不愉快になって来ました。」そして件の路上の事件を次のように解説させる。「どうです？ 一挙にして無償の行為が二つ出来たわけです。自分が選んだのではない宛名人に対する500フランの紙幣と、ハンカチを持ったために、自分が独りで我が身を選んで出たことになった者に対する平手打ちと。——どうです。結構無償じゃありませんか？ …まあ考えて御覧なさい！ 無償の行為！ これ以上反道徳的な行為はありっこないのです！」

一見すると、19世紀流の小説作法、「辻褃のあった」事件の積み重ねに食傷した青年客気のジイドの冒険的実験ともとれるが、これは彼の単なる思いつきの試みではあるまい。15年後の1914年には『法王庁の抜け穴』という同じソチの形式をとった大作となって「無償の行為」の観念は確固たる姿を現すのである。（ジイド自身、この作品の構想を15年間温めた、と云っている。）プロトス、アンチーム、ジュリス、アメデ、ラフカディオ等の登場人物達は、それぞれ偶然の見えない糸によって操られる。特にラフカディオがナポリ行きの列車の中で、偶然乗り合わせた、何の面識もないアメデを何の動機もなく、列車から突き落として殺してしまうくぐりは、因襲的な倫理に拘束されない純粋な自由意志による行為への、作者自身の希求がこめられていて興味深い。これはやがて後年の『贖金づかい』（1925）において、小説家は19世紀写実主義小説の風俗的要素を排して、「存在の本質そのもの」を追求すべきである、と登場人物のエドワードに語らせる「純粋小説」の概念にまで発展する。その意味では、ジイドはヌーヴォー・ロマン（後述）の前衛的先駆者と云うことができよう。

さて、前述したベルクソンの『意識の直接所与についての試論』にはじまる、いわゆる「生の哲学」も知性主義の決定論から解放された自由の世界の存在を人々に教え、これはやがて20世紀の実存主義文学にまで影響を及ぼす

ことになる。問題作『嘔吐』(1938)によって自らの「生の実相」を本能的に直観した体験を語るサルトルも例外ではない。『嘔吐』の主人公ロカンタンは昔の愛人アニーに会いに行こうとする直前、公園のマロニエの根っこによって一種の啓示を受ける。つまり「本質」(この語はサルトルにとっては「概念」の意に近い)を剥奪され、そこに無償、かつ偶然に在るだけの「存在」を彼ははじめて認識するのである。

「この瞬間は異常なものだった。私はそこに身動きもせず凍りついたようにじっとして、怖ろしい法悦に浸っていた。しかしこの法悦のさ中においてなにか新しいものがありました。私は「吐気」を理解し、それをわがものとしている。じつをいえば私は自分の発見したものを、ことばに直したのではなかった。今なら、ことばにすることは安易だろうと思う。要は偶然性ということだ。というのは定義を下せば、存在とは必然ではないという意味である。存在するとは、ただ単に〈そこにある〉ということである。」

当初、サルトルは作品『嘔吐』に「人間存在の偶然性に関する弁駁書」というタイトルをつけていたという。彼の狙いは何か? ここで彼は人間存在の偶然性、ひいてはこの無意味性、不条理性の空しさを暴くことだけなのか? 自然主義者達の「実証主義的科学が組み立て、濾過し、選り分けたままの外貌」である「現実」、即ち19世紀的決定論の因果律によってすべてが意味づけられている「現実」の再検討乃至は破棄を迫っているのではないか。そして、この人間存在の現実、つまり人間存在の「不条理」を直視することによって、むしろそれをバネとして、あらゆる決定論から解放された自由な人間存在として「主体性」の回復を訴えているのではないか。「不条理」をバネとした実存主義文学の萌芽は作品『嘔吐』においてすでに明らかである。

カミュの『異邦人』(1842)も亦この同じ線上にある。『異邦人』の主人公ムルソーは自分とは何の関係もないひとりのアラビア人を「太陽から逃れられず」射ち殺す。

「自分が廻れ右をしさえすれば、それで事は終る、と私は考えたが太陽の光に打ち慄えている砂浜が私のうしろに迫っていた。…焼けつくような光に堪えかねて、私は一步前に踏み出した。私はそれがばかげたことだと知っていたし、一步体を移したところで、太陽から脱れられないことも、わかっていた。それでも、一步、ただひと足、わたしは踏み出した。」

裁判が始まり、検事は母の死に際してのムルソーの行動を糾弾する。

「陪審員の方々、その母の死の翌日、この男は、海水浴へ行き、不真面目な関係をはじめ、喜劇映画を見に行つて笑い転げたのです。もうこれ以上あなたがたに申すことはありません。」

裁判長は彼に殺人の動機を尋ねる

「私は早口にしこし言葉をもつれさせながら、そして、自分の滑稽さを承知しつつ、それは太陽のせいだ、と云つた。廷内は哄笑に埋つた。弁護士は肩をすくめた。」

ここには、明らかにいまだに猛威を振っている19世紀型因果決定論的思考と倫理観への痛烈な諷刺が見られる。

最後に死刑囚となつたムルソーに御用司祭が「私はあなたと共にいます。しかし、あなたの心は盲いているから、それが分からないのです。私はあなたのために祈りましょう」と云うとき、遂に彼の「内部で何かが裂け」彼は、「偶然」の累積に支配された苛烈な己れの運命に正対し、前世紀的因果決定論に支配された周囲の因襲的倫理観、価値観の巨大な壁と、そのようなものには無関心に、己れを偽ることなく生きようとする意志との決定的な乗離を、ここに至つて本能的に直感する。つまりこれは「不条理」の自覚であり、「生命を歪める虚偽の観念に対する情熱的な反抗」（矢内原伊作『実存主義の文学』）の芽生えでもある。かくして、アンドレ・ニコラスも指摘するように、カミュにあっては「ハイデッカーやサルトルとは反対に、不条理は〈生の実存〉の中にあるのではなくして、意識からあらわれるということが解るのである。（『カミュ』）」

さて、サルトルの『『異邦人』解説』によって知られているように、カミュはその文体に複合過去を多用することによって、彼の「不条理」感——人間と世界との断絶感——を打ち出すのに成功した。サルトルによれば、カミュの文体はヘミングウェイのそれから影響を受けており、それは「時間の非連続性を透写にする、きれぎれの文章の非連続性である。」（『シチュアション I』）彼が「定過去を避けて複合過去で物語を作ることを選んだのは各章単位の孤独を強調するためである。」（同前）単純過去が「われわれを大過去、未来へと引戻す。」（同前）つまりロラン・バルトの云うように「単純過去によって、動詞は暗々裡に因果の連鎖の一部となる」（『零度のエクリチュール』）のに対して、複合過去は「その動詞の動詞性を隠す。…動詞の他動性は消え失せ章句は凝ってしまう。…過去と未来との間に橋のように身を投ずる代わ

りに章句はもはや自足する、孤立した小さな実体でしなくなる。…章句は純粹に並置される。とりわけ、あらゆる因果関係を避ける。」(『シチュアノンI』)かくして、カミュのロマンの全体を総括すれば、「不条理の人間のあらゆる経験が等価であるように、彼の書物のあらゆる章句は等価である。…つまり、念入りに因果性を除去して、われわれに不条理として与えようとするこの世界においては、どんな小さな出来事も相応の重みをもつのである。」(同前)

そして、このような徹底した決定論アレルギーは、その後のサルトルとの論争期を含む彼の「反抗」の時代——思想闘争の時代——に至って、政治思想の面でも益々顕在化して行くように見える。

「われわれは自由の為に生まれたのではなかった。だが決定論もまた一つの誤りである。(『反抗の論理』)

「科学とヒューマニズムのあいだの矛盾。違う。いわば現代的な科学精神とヒューマニズムのあいだの矛盾だ。——なぜなら、決定論と力は人間を否定するから。」(同前)

しかも、当時の左翼勢力ならびにサルトルとの論争において、受身に立たされた感のあったカミュの論旨は、ほぼ完全な決定論の崩壊という今日までの世界の政治状況を見る限り、より先見的な予言性に充ちていたことを認めざるをえない。

さて、文学の領域においても、彼の先見性は遺憾なく発揮されている。彼は1930年代、40年代のアメリカ小説を評価し、次のように分析する。

「アメリカ小説では、人間を要素的なもの、外的な反応、行為などに還元して、その統一を発見しようとしている。…分析をやらず人物の行動を説明したり要約したりする基本的な心理の動機を探ることなどはしない。だからアメリカ小説の統一は照明の統一にすぎない。その技法は人間を外面からごくつまらないしぐさで描き、会話を繰返しにいたるまで注釈なしに再現し、要するに日常生活の自動性によって人間を完全に定着するかのよう表現することにある。…この手法が写実的と呼ばれるのは誤解にもとづいているにすぎない。…この小説世界は、現実の純粹で単純な再現をめざすのではなくて、その最も自由な様式化をめざしている。現実に加えた裁断、意識的な裁断から、この世界は生まれる。こうして得た統一は低下した統一であり、人間と世界の平均化である。」(『反抗的人間』)

このような批評は、同時代のアメリカ小説の分析というよりも、来るべきフランスのヌーヴォー・ロマンの解説を先取りした感さを与える。こころみに、ヌーヴォー・ロマンの旗手アラン・ロブ＝グリエの『嫉妬』(1957)を考察してみよう。

読者の前に描かれるのは、熱帯か亜熱帯地方のバナナ栽培園の中にある一軒の家の中の2人(または3人)の人物——A、フランク、その妻のクリスチャーヌ——の動きである。しかも、それはブラインド(フランス語のジャルジー。この語は嫉妬という意味もあわせ持っている)を通して人妻Aとその友人(あるいは愛人)フランクの動きを監視している夫の嫉妬の情念に燃える視線を通してである。ところで、そのいわば中心人物の夫は読者の前には一度も登場しない。いわゆる「主人公不在」の小説である。登場人物の心理の動きは全く無視され、夫の情念に燃えた「視線の文学」でもある。しかしその視線は、心理を無視したその分だけ幾何学的な乾いた正確さで、人物達の動きや背景——バナナ園、小川、橋、黒人の労務者等の一切——を読者の前に映像化する。この手法は、一見、極度に写実的に見えるが、実はそうではない。19世紀的写実主義とは全く異質のそれである。ロラン・バルトは、このロブ＝グリエの視線の綿密さについて次の如く解説している。

「…したがってすくなくとも傾向的には、ロブ＝グリエの作品には、歴史への、逸話への、動機づけに関する心理学への拒否と同時に、対象の意味づけへの拒否がある。そこからこの作家における視覚的描写の重要性が生まれる。ロブ＝グリエはほとんど地理学的に対象を描くけれども、それは対象を人間的意味づけからはずし、対象をメタファーや人間との同類視化から矯正するためである。ロブ＝グリエにおける視線の綿密さ(もっともここでは綿密さというより、たしかに規則無視である)はしたがってまったく否定的なものであり、それは何もかも設定しない、というよりむしろ、まさしく対象の人間的無を設定するし、それはいわば虚無を隠す凍りついた雲のようなもので、結果としてこの虚無の存在を指示する。視線は、ロブ＝グリエにあっては本質的に浄化的な行為であり、たとえ苦痛をあたえるものであっても、人間と対象との連帯の切断である。(『エッセ・クリティック』)

更に時間の整合性は、この作品では全く無視されている。作者自身が自作を解説している如く「つねに現存し、削除されることのないこの語り手は、順序よく物語るということを眼中におかない。」つまり「物語の中の時間の

配列が順序立ってないのである。」このように、ここでは従来の小説における因果律に従った「物語り」性は完全に失われている。それに加えて、この作品における時制は「直説法現在」が基調になっている。何故か？ それはジャン・ブロック＝ミシュルも云うように「ロブ＝グリエは『嫉妬』を書くとき、嫉妬そのものは客観的に知覚され、視線に映ずる事実を通じてのみ表現しなければならない以上、この感情を除いて他の一切のことを問題とする。このようにいかなる感情も表現しないからこそ、作者はしばしば直説法現在で書かざるをえないのである。」(『ヌヴォー・ロマン論』)更に言えば「私達をとりまく対象物とは持続においてのみ交流が可能」(同前)なのに対して「全く点状の現在においては対象物は私とは完全に縁もゆかりもない」(同前)が故に、「私とは完全に遊離した対象物の存在、私と周囲のものとの一切のコミュニケーションの欠如を表現するために、というよりそれを指示するために」(同前)この直説法現在は執拗に用いられるのである。

かくして前述のように、カミュは『異邦人』において、因果律を断ち切るために直説法単純過去を排して、直説法複合過去を多用したが、ロブ＝グリエは更にこのカミュをも乗り越えて、人間と周囲の対象物とのコミュニケーションの遮断をはかるのである。

浜田明氏はロブ＝グリエの1958年の論文『自然、ヒューマニズム、悲劇』についてふれ、次の如く演じている。

「この論文はほとんど全頁が『異邦人』と『嘔吐』にたいする分析と批判であり、いわゆる伝統的小説については語られていない。…しかも、ロブ＝グリエが批判の対象としているカミュの〈不条理〉の思想とサルトルの〈世界認識〉の問題は、むしろ伝統的小説を越えたヌヴォー・ロマンに近い思想であり問題である。ロブ＝グリエはムルソーの悲劇を〈人間と世界との人間精神の欲求とそれを満足させぬ世界とのあいだにある越えがたい深淵、すなわち不条理〉にあるとする。つまり、ほんらい無関係であるべき人間と自然(または事物)とのあいだに関係を求めようとするところに悲劇が生まれたとするのである。また、ロカンタンは〈わたしはマロニエの根であった〉という。ロブ＝グリエによれば、この事物と人間とを混同した認識方法に近代人の悲劇性があるのである。カミュもサルトルも〈事物の外部について考えず、《事物とともに》考えることが問題なのである。〉こうしてロブ＝グリエは、二人の世界認識の方法を批判し、さらには記述表現の問題にたちいり、

カミュやサルトルの〈事物と精神を混同した〉〈曖昧な〉品質形容詞の使用、あらゆる種類のアナロジーの使用を指摘するのである。』（『ロブ＝グリエの小説美学』）

誠に正しい指摘である。つまり、人間と事物が遮断された状態で、お互いに分を守って他の領域を犯すことなく、人間がもともと意味を持たない事物の中に無理に押入って行かなければ、不条理は生じないし、したがって悲劇も生じない、とするわけで、ここまで来ると、ヌーヴォー・ロマンはサルトル、カミュの不条理さえも完全に相対化してしまったことになる。そしてこれは、勿論、人間主義に基く因果決定論の根こそぎの否定にまで達していると言わざるをえない。

以上が決定論という因果律に搦めとられた19世紀型小説の約1世紀の長きに亘る解体作業の軌跡であり、逆に云えば、それは19世紀に完成したフランス型決定論が文学の中にいかに強固な地盤を築いていたかの証左でもあろう。

ところで、このことは西洋文学の受容をバネとして近代文学への脱皮を模索した、明治期における日本文学の方向とも無縁ではない筈である。というのは、この科学的決定論を内包したフランス自然主義文学の黄金時代は、わが国の明治10年から20年に至る10年間にあたるからである。ところが明治18年の逍遙の『小説神髓』（この小説論には、逍遙がそれと気付かずして、英国を経由したテーヌ、フローベール、ゾラの文学観がこめられている）をはじめとする一連の啓蒙的文学論に端を発した、いわゆる「没理想論争」（明治24年～25年）において、鷗外の「覆面したるゾラ」、逍遙批判の中には、フランス自然主義のバックボーンたる決定論への考察は殆ど見られない。即ち当時のドイツ文学の泰斗ハルトマンの影響下にあった鷗外に主導されたこの論争は、殆ど審美的あるいは倫理的側面にその論点が限られ、小説の形式論に終始した感があり、決定論への考察、ひいてはその理解、受容がなされた形跡はない。原因と結果を合理的な線で繋ぐ西洋型因果律を、当時、前向きに理解しようと努めたのは、むしろこの論争で守勢に立たされた逍遙、及びそれに続く小杉天外、長谷川天溪等極く少数の文人に限られていた。その結果、「縁」という日本文学伝来の「入れ子型」因果律が、これを機に再検討されることも遂になかった。かくして、以後の日本文学は形式的には西洋文学の体裁を採りながらも、フランス文学が体験したような、決定論的思

考を数世紀に亘って至高と信ずる域にまで営々として積み上げ、しかもそれに自ら疑問をつきつけ、再検討し、敢然として解体して行く、という長く重い体験を試みる機会を、幸か不幸か失ってしまったようにみえる。

(付記) 本稿は1989年7月8日、日本比較文学会九州支部春季大会で発表した「フランス自然主義と決定論」の前半である。後半の日本文学との関係については紙数が尽きたのでレジュメにとどめたが、詳述は次の機会に譲りたい。

参考文献

- 1 テーヌ『文学史の方法』、瀬沼茂樹訳、岩波書店
- 2 ピエール・マルチノ『フランス自然主義』、尾崎和郎訳、朝日出版社
- 3 クロード・ベルナル『実験医学序説』、三浦栄訳、岩波書店
- 4 『ジイド全集』、新潮社
- 5 ジイド『鎖を離れたプロメテ』、小林秀雄・河上徹太郎訳、新潮社
- 6 ジイド『法王庁の抜穴』、生島遼一訳、新潮社
- 7 『サルトル全集』、人文書院
- 8 サルトル『嘔吐』、白井浩司訳、人文書院
- 9 サルトル『シチュアションⅠ』、窪田啓作訳、人文書院
- 10 カミュ『異邦人』、窪田啓作訳、新潮社
- 11 カミュ『反抗の論理』、高島正明訳、新潮社
- 12 カミュ『反抗の人間』、佐藤朔・白井浩司訳、新潮社
- 13 アンドレ・ニコラス『カミュ』、高島正明訳、新潮社
- 14 アラン・ロブ＝グリエ『嫉妬』、白井浩司訳、新潮社
- 15 ロラン・バルト『エッセ・クリチック』、篠田浩一郎・高坂和彦・渡瀬嘉朗訳、昌文社
- 16 ロラン・バルト『零度のエクリチュール』、渡辺淳・沢村昴一訳、みすず書房
- 17 ジャン・ブロック＝ミシェル『ヌヴォー・ロマン論』、島利雄・松崎芳隆訳、紀伊国屋書店
- 18 平岡昇『プロポⅠ』、白水社
- 19 野内良三『言葉の自立』、審美社
- 20 矢内原伊作『実存主義の文学』、河出書房
- 21 浜田明『ロブ＝グリエの小説美学』、牧神社
- 22 河内清『ゾラと日本自然主義文学』、梓出版社
- 23 『坪内逍遙集』(「明治文学全集16」)、筑摩書房
- 24 『坪内逍遙集』(「日本近代文学大系3」)、角川書店